東京清陵会だより

第 7 号
編集・発行
東京清陵会
（諏訪清陵高等学校同窓会東京支部）
事務局
〒270-11
我孫子市白山 2-15-2
林 尚孝 方
TEL 0471-83-2726

インタビュー

上原三枝選手（93回生）

さあ行こう 長野オリンピックへ

98年の長野・冬季オリンピック。この地元五輪にわが清陵OGの上原三枝さんが出場する。ここまでの道、勝負の厳しさを語る…。

来年初、新設の長野五輪のホームリンクに登場、そして98年本番へ
（JNF 提供）

――清陵高校百年の歴史でもオリンピック選手は初めてでしょう。しかも地元・長野県での九八年の冬季オリピック。どんな選手か――橋本聖子さんみたいな筋肉ウーマンかなと恐れていたのですが、普通のお嬢さんでひと安心(笑)。まず、スケートを始めたキッカケなどから……。

上原 城北小学校(諏訪市)にスケートクラブがあって、姉二人(現姓・長澤薫さん＝清陵87回と、上原綾子さん＝同91回)がやっていたので、親としては三人目も必然的にやらせたのでしょう。リンクは競馬場跡にあった諏訪市営のものでしたが、今はもうありません。

――本格的にスケートで「行けるかな」と考えたのは…。

上原 高校二年のインターハイ優勝からだと思います。それまで陸上と両方やっていたのをやめて、スケート一本でいこうと、決めたので。

孤独な練習が今につながる

――当時の清陵のスケート部は…。

上原 スケート部は私も含めて三人きり。一年上の先輩が出たあとは、練習内容も自分で決めて後輩と一緒に細々とやっていました。いま振り返っても、我ながらよくやったというか、苦しい時期でした。顧問の先生や指導してくださる方もいらしたのですが、やはり何か確信・自信がもてない。自分の力はもっとあるのじゃないか、それなのに出ない。どうしたらいいのか……という感じでした。

――進学かスケートかも悩んだ…。

上原 当時はまだ特に「スケートだけ」ではなく、教員志望だったのでその方での進学を考えていました。そんなとき一人でスケートをやっていても自信はないし、勉強もしなきゃいけないし、いつもどこかで何かがひっかかっている感じでした。自分でプランを立てて実行しようとしても、苦しい時は甘えが出る。そんな時、背中をポンと叩いて押し出してくれるか、引っ張ってくれる人が欲しかった。自分しか頼れない…いろいろ考えることの多い思春期の、高校生にはつらかったですね。

でも、あの時代があったから、学生になっても甘えることなくスケートに取り組めたので、後悔はしていません。

――日体大二年生、二〇歳の九二年、アルベールビル五輪代表になった。

上原 高校時代までの短距離から、一五〇〇、三〇〇〇、五〇〇〇mの中長

1996年度 東京清陵会定期総会案内 第30回記念大会

1.日　時　**1996(平成8)年10月25日(金)，午後6時より**(5時受付開始)
2.場　所　**虎ノ門パストラル/新館1階/鳳凰の間**(昨年度と同じ会場です)
港区虎ノ門4-1-1(電話03-3432-7262)
3.交　通　地下鉄日比谷線／神谷町駅下車，4b出口徒歩2分.
銀座線／虎ノ門駅下車，徒歩8分.
4.議　事　(1)1995年度会務・決算報告
(2)創立100周年記念事業の報告
(3)1996年度事業計画・予算案審議
(4)役員改選の審議
(5)その他
5.懇親会　議事終了に引き続いて行います
6.会　費　**8,000円**
7.特別出演　諏訪八剣太鼓打ち鳴らし（諏訪八剣太鼓保存会の皆さん）
8.ほ　か　会場にて，小平恒彦先生(48回)の油絵・パステル画を展示いたします．また第30回大会の記念として「特別記念品」を用意いたします．ご期待ください．
9.当番幹事　63回生，次期当番幹事64回生，サブ幹事73・83回生
10.出　欠　ご面倒ですが，ご出席・ご欠席どちらの場合でも，同封の返信用ハガキに必要事項をご記入のうえ，10月15日(火)までに到着するようご返送ください．

距離専門になったのですが、アルベールビルの結果はそれぞれ一一、一七、一四位と、失敗レースでした。

――その二年後の九四年リレハンメル五輪では代表になれず、涙を飲んだ…。何があったのですか。

上原　それだけの力がなかっただけのことです。実は卒業と同時にスケートはやめようと思っていたんです。それがアルベールビルを経験して欲が出たんですね。本格的にやっていこうと取り組みました。が、結果を求めることを急いでしまい、滑りが崩れて思いどおりにはいかない。精神的にも自分で追い詰めてしまったという状況でした。

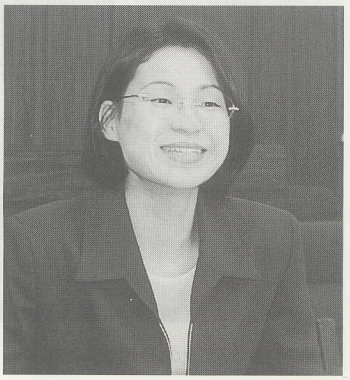
スランプから脱した日

――そのスランプを乗り越えて今日があるのですが、キッカケは……。

上原　失敗したのはリレハンメルの一シーズンだけで、その年に今のJNFに入社し、次の九四～九五年のシーズンには全日本選手権総合優勝など回復しました。結局、自分が考えていた「これが正しい滑り方」が間違っていたのです。ある日練習先で学生選手の滑りを見ていた時に、「あっこれかもしれない」というひらめきがありました。

それまでは「単に足を早く動かす」ことを考えていたが、最終的には「自分の体を前に進めることのほうが大事だ」という思いに至ったのです。それをつかむまでは考え込んでいましたが、偶然に自分を生かすことができて、回復は早かったです。

――いわゆる「ドイツ型」の滑り方に変わったとか。コーチはどなた…。



上原　日体大の田中邦雄監督です(富士見出身、岡谷南高校OB)。五輪落選の後は「自分で考えろ」と突き放されていましたが、今のヒントをつかんでからは、確実に自分のものにするまで、ずっと相談してやってきました。

回復した九四～五年のシーズンは世界選手権で六位に終わりました。そして翌シーズンからは、「もっと上を狙うには、どうしたら世界のメダルに手が届くか」を考えて練習をスタートしたのです。その結果やはり、グンダ・ニーマン選手のようなドイツ型の滑りをお手本にするのがいいのではないかと。

――そして昨九五～九六年シーズンの大活躍(別表)になったのですが、いちばんうれしかったのは…。

上原　やはり世界選手権の総合三位です(九六年二月、ドイツ・インツェル、メダルは橋本聖子選手以来)。大学一年生の時から六年連続で出場してきた、私としてはかなり「こだわり」のある大会でしたので、うれしかったです。

――ワールドカップでも総合二位。

上原　ワールドカップはポイント制で最初のベルリンから最後のカルガリーまでで総合順位を出す。一五〇〇mで一位ニーマン選手、二位が私。三〇〇〇mは一位ペヒシュタイン選手(独)、二位ニーマン選手、三位私でした。

さあ、長野オリンピックへ

――さあ、いよいよ九八年の長野オリンピックですね。すでに代表選手に内定していますが、最大ライバルはドイツのニーマン選手や、ペヒシュタイン選手ですか。

上原　三〇〇〇、五〇〇〇mでは二人にまだちょっと水を開けられている。ペヒシュタイン選手には一度だけ勝ったことがありますが、その他はほとんど全敗状態(笑)。ただ負けてもその差が〇・二秒の時もあれば、四秒差の時もあって、マチマチだということはまだチャンスがないわけではない。絶対に届かない差ではなく、ちょっとでも可能性があるならば賭けてみたい。

またペヒシュタイン選手は私と同年輩ですが、ニーマン選手は三〇歳位で昨シーズンは体の故障もあって、一昨年までの圧倒的強さはなく、オランダのトーマス選手やペヒシュタイン選手には負けている。長距離も差が縮まっているかなという感じです。

――当面の目標としてはニーマン選手らに勝つこと?。

上原　いえ。結局目標は「対人(ひと)」ではなくて、自分のレベルをどこまで引き上げられるかの問題です。最終的にはその人に勝たないと上には行けないのですが……。当面の目標は、来年二月一五～一六日長野の五輪リンクで世界選手権が開かれるので、そこでぜひメダルをとりたい。その前に同じリンクで全日本選手権(一月一一～一二日)があるので、まずは足固めをしたいですね。

――それまでの日常のトレーニングは? 今は原子燃料を製造しているJNF(日本ニュクリア・フュエル)所属ですが…。

上原　JNFは東芝・日立・米GEの合弁会社なのですが、日体大先輩で東芝勤務の青柳徹さんから紹介していただきました。練習は今でも世田谷の日体大グランドで学生と一緒にやっており、午前中は横須賀の本社に通って勤労課の仕事をし、午後は世田谷に戻って練習という一日です。四～六月は国内で陸上中心のトレーニング、七～八月から海外に出て、一〇月から本格的に氷に乗り、一一月後半から試合です。

小さい体で勝てる理由

――それにしても、キャシャな姿で決して強そうには見えない(笑)。一六二・五センチ、五一キロとか。

上原　今は四九キロです。昔は一定以上の体重・体型がないと勝てないかなというコンプレックスもありましたが、私の場合はもともと細くて長い筋肉で、ウエイトトレーニングしても筋肉がつきづらい。要は鍛え方であって、見かけは細くても中身が詰まっており、それを活かして滑る――自分の体を前に押し出す力さえあれば、体重自体は軽くてもよい。結局はバランスの問題です。陸上の距離競技などと違ってスケートは器具を使った競技です。つまりそれを使う技術――器具をいかに使って自分の体＝物体をいかに早く前に進めるか――がポイントで、体だけの勝負ではないんです。スケートの面白さはそこにあると思います。

リレハンメルの時も、体だけで勝負しようとして、ひたすら練習、練習…。自分の長所を生かせなかった。スケートは体の勝負ではなく、バランスの勝負であると、今は思っています。

――今はもう、特に日々苦しみながらスケートをやっている訳ではなくて(笑)、楽しんでやっている……。

上原　はい。昔はいろんなことを我慢しながらやっていたのですが、今は精神的にムリはしていない気がします。

――上原さんにとっては、ほろ苦き清陵時代だったかもしれませんが、遅ればせながら同窓生一同、最大限の応援をいたします。ご活躍を祈っています。

上原　ありがとうございます。

上原三枝選手の略歴／戦歴

1971年7月1日諏訪市生れ. 87年上諏訪中学校, 90年諏訪清陵高校(93回), 94年日本体育大学体育学部卒業. 同年JNF入社. 主な競技成績は,

89年＝全国高校総体1000m優勝.

91～94年＝日本学生氷上競技選手権1500m3連覇, 3000m4連覇.

92年＝全日本選手権総合優勝. アルベールビル五輪1500m11位, 3000m17位, 5000m14位.

93年＝世界選手権総合5位.

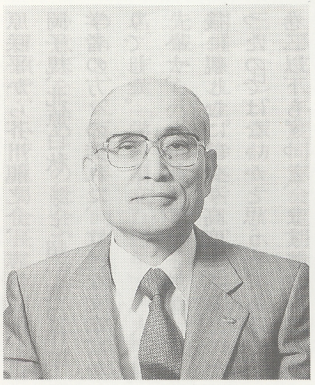
94年＝世界選手権総合6位.

95年＝全日本選手権総合優勝. 世界選手権総合6位.

96年＝全日本選手権1500m, 3000m, 5000m各優勝, 総合優勝. 世界選手権1500m, 3000m, 5000m各3位, 総合3位. ワールドカップ・カルガリー大会1500m2位, 3000m3位, 5000m優勝(各日本新記録). ワールドカップ総合得点1500m2位, 3000m3位.

桜と富士と清陵と

会長 小平 祐（42回）



私は桜と富士が好きだ。

桜といえば、日本の桜百選に名を連ねる名桜が諏訪を取り囲んでいる。高遠城、上田城、小諸城の桜と、日本最古の山高神代桜である。その中にあって、わが清陵の昔の桜も美事だった。春の運動会に舞う桜吹雪は今も瞼に浮ぶ。

富士といえば、これも諏訪とほど遠からぬ位置にある。葛飾北斎の「富嶽三十六景」に「信州諏訪湖」があって、富士を背に、遠景に高島城が浮び、近景に湖岸の納屋が息づく様に画かれて、当時の諏訪を偲ばせる。また、古謡にも唄われている様に、〝富士が化粧する鏡は諏訪の湖水〟であった。桜と富士とわが故郷は縁の深い間柄である。

この春、私は故・宇野千代さん心入れの根尾谷淡墨桜と今売り出し中の岐阜新境川堤を訪ねた。神秘的で絢爛豪華な桜だった。はしなくも、帰りの車窓に富士の雄姿が現われる。夕映えに薄紅に染った山容は荘厳で感動した。新しい桜と富士の発見だった。

私の桜と富士への思い入れの原点を探ると、清陵へ入学早々の国語の教室につきあたる。平林盛二先生が岩波国語を開いて、芳賀矢一「桜」、続いて小泉八雲「曙の富士」を講義され、「日本の心」とか「もっと高い所を見よ」などと諭された。それらはそのまま私の胸に焼き付けられて、桜と富士への夢が膨らんでいった。

清陵を終わり、社会の風にあたると、その夢も萎んでゆく。桜と富士の美しさを包む平凡な装いに若い神経は馴染まず、反発すら覚える。桜と富士への反抗期である。

時が流れ、人生の折返点を過ぎると美意識も変る。水上勉「桜守」、新田次郎「富士山頂」にも出合って、厳しい美しさに心を打たれる。回帰のピッチは上り、今では一端の桜ファン、富士ファンである。

＊

私は清陵が好きだ。

清陵の友は懐しく、行事は楽しい。この思い入れの原点は、爽やかな校風、独得な伝統、知的な風土の中にあって培われた清陵の誇りである。

清陵を終わり、社会の波浪にぶつかると、その誇りも呑み込まれて、欠陥ばかり気になる。清陵離れの時期である。

時が流れ、ミドルエイジを迎えると、清陵のよさを再発見し、誇りが目覚める。清陵回帰が進み、友人達は爽やかな清陵を運んできてくれる。

こうしてみると、私の中の清陵は桜と富士と同じサイクルで蘇っている。今では幾千万の人に幾千の母校があるだろうが、わが清陵に優る母校はないと思っている。

＊

東京清陵会は日本の首都にあって、素晴らしい母校を共有する人々の集団である。内容も豊かで楽しく、今後も一層の発展が期待される。

今般、八年間の会長職を去るにあたり、会員諸賢のご協力に深謝申し上げ、新役員の皆様のご活躍と、東京清陵会の新しい発展を心より祈念して、ご挨拶に代える次第である。

次代を担う逞しい若者の育成を

学校長 松下 勲（59回）

東京清陵会の皆様方には、その後いかがお過ごしでしょうか。平素は、母校の発展に温かなお心をお寄せいただき誠にありがとうございます。

また、昨年度は、学校創立百周年記念に際し、物心両面にわたって多大なるご支援を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

さて、新たなる第一歩を踏み出した本年度は、二八二名の新入生を迎え、全校で九三〇名（女子四一％）の諸君が、学習や部活動等に励んでおります。

この三月卒業生の進路状況は、節目の年でもありましたが、よく健闘し、大学への進学率が六〇％、短大等を合わせ六五％（前年度比一〇％アップ）と、これまでで最高の結果を出しました。とりわけ、大学への進学率六〇％は、長野県内の高校では、トップクラスにランクされるものであると、自負しております。

その結果を考察してみますと、授業第一主義に加え、自発的な学習態度の確立、予・復習の徹底、進路目標の明確化、さらに部活動等への積極的参加などが良かったのではないか、という分析がされています。部活動との両立についても、部活動を最後までしっかりとやった者が、本番でも持てる力を十分発揮できたことは、一つの示唆を与えているのではないかと思います。

知識・理解の量的な面にのみ偏らないトータルとしての幅広い学力、精神的な逞しさ、人間としての成長が図られる中で、受験に対応する力も培われてくるものであると思います。

進学面での成果に加え今夏は、野球部が強豪・長野日大、松商学園高校等を連破し、遂に決勝戦まで進出。東海大三高に惜敗して「開校以来の甲子園」は叶わなかったものの、夢と興奮に、同窓会の方々ともども、皆酔いました（13頁参照）。ほか男子テニス部が団体戦で初優勝、端艇部とともに全国大会に、陸上、剣道も北信越大会に進出しています。

さて、昨年九月に県教育委員会が実施した意識調査によると、本校生徒は、進路について、㋐「浪人はしたくないので、合格できる学校を選びたい」が四四％、㋑「希望する学校には、浪人してでも入りたい」が三七％で、㋑の県平均（一九％）に比べ、初志貫徹型が多くなっております。

また、理想の教師像として、㋐「ユーモアがあって授業を飽きさせない先生」が六八％、㋑「厳しいが、生徒の気持ちを理解してくれる先生」が三四％、㋒「自らも勉強している先生」が二七％となっており、現代高校生気質が見られる一方、㋒については県平均（一五％）より高く、学究肌の教師を求めている傾向が表れており、本校の特徴的な生徒の教師観がうかがえます。

以上、学校の近況や生徒の意識等をご報告させていただきましたが、引き続き、受験一辺倒に偏ることなく、次代を担う逞しい若者の育成に努めて参りたいと存じます。

東京清陵会会長の小平祐先生には、各年度の入学式、卒業式、そして百周年記念と、本当にお世話になりました。心から御礼申し上げます。

東京清陵会と会員の皆様方の益々のご発展、ご健勝を祈念いたしております。

新役員（候補）から　ひとこと

東京清陵会の役員が、一〇月二五日の本年度総会での議決をへて、交替いたします。一九八八年から八年間、会長をつとめられた小平祐氏のほか、小松誠副会長、名川方敏監事の皆さんが退かれ、新たに、会長に寺島敏郎氏（50回、現副会長）、副会長に林尚孝氏（52回、現事務局長は兼任）と渕上良子氏（56回）、監事に小松誠氏（42回、現副会長）と今井恒夫氏（57回、現職）が就任します。以下、新三役からの「ひとこと」です。

蜘蛛の糸

副会長　小松　誠（42回）

私は諏訪中学入学昭和一一年、一六年卒業の四二回生、当年七二歳です。上諏訪の高島小学校入学は昭和五年で、習った国語は当時「ハナ、ハト、マメ、マス、ミノ、カサ、カラカサ」で始まるものでした。

それから六年の小学校の後に、中学で習った国語は岩波書店編集発行の国語巻一以下全一〇巻、定価各冊金五拾五銭也の立派な読本です。その内容は芳賀矢一、小泉八雲、夏目漱石、中勘助に始まり、吉村冬彦、若山牧水、藤原咲平から芥川龍之介、志賀直哉、正岡子規、北原白秋……と超一流の作家、学者の方々の秀れた、立派な文章ばかりでした。

ハナ、ハトで始まった子供が、六年後に親しむには少々高度すぎるものだったのではないかと思う程であるが、巻二以下もずっと、ますますレベルの高い内容が続いている。

それは六〇年の歳月を経て、今読んでもすばらしい文章であるばかりか、ところどころ読解出来ない程難しいものである。

その巻の一の中程に、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」が載っている。例のお釈迦様が地獄の底からカンダタという罪人を助けてやろうと、蜘蛛の糸を垂らしてやり、カンダタが途中までたぐってのぼっていったが、途中で後からその糸にとりついて登ってくる多勢の人を見て、「この糸は己のものだ、お前達は降りろ」と云った途端に糸が切れて、皆元の地獄に落ちてしまった、という話です。

振り返ってみれば卒業以来永い年月、特に戦争をはさむ混乱の時期を経て、毎日悪戦苦闘を繰り返して来たのであるが、それらの日々を紡ぐように、諏訪中学時代に身体のどこかに培われたなつかしい人々とのつながりが、一本の蜘蛛の糸のように、私の人生をつないで来てくれているように思う。

同窓会の諸先輩のもとで、会の仕事の手伝いをさせて頂くようになって二十数年、それまでクラス会で同学年の友を中心のつながりが上下にひろがり、多くの方々に親しくして頂き、私の人生の一面を形造るほど多くのものを得させて頂いた。

今やまさに残り少ない人生を前にして、同窓、同級の仲間は何にも替え難い、日々の拠り所、元気の源泉であります。

こうした大切なお仲間を紡いでいる蜘蛛の糸は、しっかりしていて、どんなに大勢の人がとりついていても、ますますしっかりと結んでくれて、実り多い、楽しい老後を過すのに役に立ってくれるように思い、またそう希っているところです。

「六十四歳になったら」

寺島　敏郎（50回）

ビートルズに「六十四歳になったら」When I'm Sixty-four という曲があって、ポール・マッカートニーが気分よさそうに歌っている。メロディラインがシンプルで調子が良いので、いつのまにか私も節だけ覚え、鼻唄でよく歌っていた。

この二月、私は六十四歳になり、役員任期の切れ目をしおに、五月末で会社を退いたのだが、ふと、あの曲の歌詞は、六十四になったら何か良いことがあるよとでもいっているのかいな、と調べてみた。すると、ナーンダ、「今から何年も経って僕の髪が薄くなっても、君は誕生日やバレンタインにはワインの壜を送ってくれるかい？」というような、少々情けないものだった。

「一年生になったら、友だち百人できるかな？」と幼稚園児の孫が歌うように、「なったら」は期待感に満ちたフレーズなのだ。ビートルズのあの歌詞は「なっても」であって「なったら」と訳しては、ちょいと違うのじゃないか。

だがしかし、東京清陵会には四千数百人余の同窓生がいる。友だち（偉大な先輩方をも友だち呼ばわりする失礼はお宥し願うとして）百人どころではなく、千人の単位でいるのだから、「六十四歳になったら」でも、マアいいか……と思うことにした。

どなたか、事務局長の後任を

林　尚孝（52回）

「義を見てせざるは勇なきなり」と、事務局長をお引き受けしてから八年が経過しました。前事務局長の故・保延醇一さんが、三千数百人への総会通知を手書きで一〇年間も発送し続けられたことを聞き、感激したことがきっかけです。

事務局長をお引き受けするに当たって考えたのは、事務の合理化ときめ細かな情報の発信でした。振り返って見ますと、当初考えていたことはほぼ実現できたように思います。パソコンを利用した会員データベースの確立、東京支部だより（東京清陵会だより）の発行、支部会員名簿の発行、会費徴収率の向上などです。小平祐会長はじめ、会員各位の力強いバックアップがあったからと、心から感謝しています。

さらに、各学年幹事のご努力により総会参加者が二百名弱から三百名強に増加し、終身会費徴収により繰越金の大幅増加など、予期しなかった結果も生まれました。事務局のお手伝いをするようになり、先輩・後輩との思いがけない繋がりができ、楽しく・有意義な時間を過ごすことができました。

今回事務局長と副会長を兼任することになりました。実は、四月から茨城大学農学部長に就任したのですが、予想以上に時間と神経を消耗するため、なるべく早く事務局長をバトンタッチ

したいと、考えるようになったためです。もちろん、これからも出来るだけの努力は続けるつもりです。しかし、そんな事情ですので、どなたか事務局長の後任に名乗りを挙げて頂ければ幸いです。よろしくお願いします。

懐かしさと新たな出会い

渕上　良子（56回）

昨年一〇月、百周年記念総会のあとの祝賀会で、懐かしい大勢の方にお目にかかった。

中でも、小・中学校時代に住んでいた上諏訪末広町の家の近所に住んでおられた、七歳年上の先輩に声をかけられた時は、本当にびっくりした。私が小学校に入学した頃はすでに諏中生で、私の方では「白線の入った帽子の似合うカッコいいあこがれのお兄さん」だったが、先輩から見れば子どもの私など、記憶になかっただろうと思っていた。

先輩はその後東大に進まれて諏訪から離れ、勿論一度も話をしたわけではないが、祝賀会の時はひとしきり当時近所だった同窓生のことなど話し、私にとっては感激のひとこまだった。今も同じところに住んでお仕事をされている由、先輩・後輩の関係になれてよかった、と思っている。

同窓会は単に同学年の人に会うだけでなく、かつて同じ地域に住んでいた方、仕事を通じて知り合った方など、大勢の方々と再会を喜び、同席した方々との新たな出会いの場でもあると思っている。

女性会員の皆様に一言――私が同窓会に出席するようになったのは、卒業以来二十余年経ってのことで、女性の先輩がいなかったし、珍しいものでも見るように（?）見られるのもいやで、なかなか勇気が出なかった。清陵も今や女子生徒が半数近い時代、気軽に参加していただきたいと思う。東京清陵会の当番幹事も、今年は何人女性が参加してくれるか気をもんでいる様子、ぜひご期待に応えておでかけいただき、総会を盛り上げてほしい、と願っている昨今である。

《清陵高校　NOW》――①
変わらないもの、変わるもの

同窓会事務局長　小口　祐一（47回）

清陵祭も今年で四六回である。相変わらず賑やかな文化祭であり、後輩たちは夏の暑さをはねとばすように祭を満喫している。その姿は一〇年前とも二〇年前ともそれほど変わっていないように見える。しかしその中にも、何か違うという感じ、あるいは雰囲気があるように思われる。

まずパンフレット。毎年工夫を凝らして作られ、ポスターとともに清陵祭の顔ともいえるものだが、このところマンネリになってきたような傾向がある。ただ単に発表・展示の場所と時間の紹介で、内容の説明が盛られていない。二七のクラブ・同好会等の展示発表があるのだが、そのパンフで多少とも内容の分かりそうなのは一〇クラブにすぎない。自分達がこの一年間何に情熱を注ぎ、何に注目して研究してきたのか、各クラブの主張が見られないのである。

清陵祭のメインは何といってもファイアストームであろう。校舎改築中は、やむをえず小規模にしたことがあったが、天を焦がすあのファイアと、泥んこになって火の廻りを走り回る熱狂は、おそらく何十年と続いている清陵名物であろう。ただ消防法の関係もあって、祭の終わった後に消えて行く火を囲んで燃え尽きた青春の日に涙するという感激を味わわさせてやれないのは、かわいそうな気がする。

その他、清陵祭で変わったことと言えば、合唱コンクールで「課題曲」がなくなったこと、先生たちも負けじとばかり本気で頑張った相撲大会がなくなったこと、などであろうか。

今年、「これは!?」と思わせたのは、校内に乗り入れる先生達の自動車のフロントに、名前入りの許可証を貼って欲しい、という警備係の生徒からの要望だった。顔を知らない先生が多くなったということなのだろうか、先生の数は近年むしろ減少気味なのに。

それにしても県内のほとんどの高校が、クラス単位の出し物になっている中で、発表をするクラブが少し減ったとはいえ、まだまだ研究発表を主体とした、すなわち文化活動に主力をおいた文化祭を続けているところに、清陵の伝統と意地を見ることができよう。

清陵祭以外の学友会行事では、大正以来の伝統の湖周マラソンが健在。毎年一〇月の最終土曜日（ないし金曜日で、今年はたまたま東京清陵会総会と同じ一〇月二五日）、在校生に加えて、毎年三〇名ほどの先輩も一緒になって、約二三キロの道を力走している。戦前とはだいぶコースが変わったが、「牛正坂」をあえぎあえぎ走り抜け、完走者にリンゴがでるのも相変わらずで、先代の持田明夫校長が途中の岡谷から走ってゴールインしたが、係の生徒がリンゴをくれず、校長は翌年から猛練習をして全コースを完走、見事にリンゴを手にしたというのは有名なエピソードである。

「矯風会ものだぞ！」

こうした行事も種々な都合で出来にくくなってきており、四月に行っていた湖周駅伝は昨年から中止となってしまった。一つには交通事情の悪化もあるが、生徒自体の中に「ズク」のいる行事を敬遠する風潮がかいま見られるのも事実である。学友会総会の流会が続いたり、学友会誌「清陵」の論説や文芸欄が、平成に入る頃からすっかりページを縮小してしまった、というようなことも指摘できる。しかし美術や音楽など、芸術関係のクラブ活動には目を見張るものがあり、古典ギター部などは毎年のように大阪で行われる全国大会に出場している。絵も書も、大変素晴らしいセンスの持ち主がいて、文化祭の展示を一見すれば「さすが清陵生」との感慨を深くすること間違いない。個人的には素晴らしい後輩は多いのである。

勉強と進学については、今年の六月発行の同窓会報第二二号にある「学校だより」を参照していただきたい。全体的にはまあまあ頑張っていると評価できるが同窓の先輩としては、まあまあではなく、「千万人のファイト」で突き進む清陵生であって欲しいことは言うまでもない。

現今の生徒達はいやに物わかりがよく、ひとはひと俺は俺で、みんなと一緒に馬鹿になれなくなっているように思われる。社会の目もうるさくなって、昔のような馬鹿なことができないのは事実であるが、スマートな清陵生など本来の清陵生ではないのではないか。学友会総会があるというのに手をつないで帰って行くカップルの生徒と、それを奇異なこととも思わない他の生徒達を目の当たりにすると、泥臭いバンカラな気風の中で育ってきた先輩としては、隔世の感に襲われ、絶望に近い気持ちにまで陥って、つい叫んでしまうのである。「矯風会ものだぞ！」

母校 諏中 清陵 そして…今。

新しい清陵歌を作っては

有賀　博(26回)

私は、中学卒業後、一度も校舎を尋ねていない。小学校、中学、旧制高校、東大と長い学生生活を送ったのに、中学の思い出は、茫然としている。無理もない、七六年前のことだからだ。

この稿を書くよう依頼を受け、改めて同窓会名簿を開いてみた。一九二〇年入学。一九二五年、一五六名卒業とある。生存者を数えて、今や二五名となっているが、三名を除くと、後は顔も思い出せない。この三人も上諏訪の高島小学校からの友人である。中学へ入学すると、旬日をおかず、矯風会というのが開かれた。狭い雨天体操場の板の間に正座させられ、五年生の委員が、主として四年生を対象に、関西へ修学旅行に行った時、女物の櫛(くし)とか、婦人用の財布を買った人を、指名して呼び出し烈しく叱責した。聞いていると、妹や母親の土産に買ったと弁明していた。一年坊主の私達は、何の事やら分からず、恐怖心で震(ふる)え上った。また町場の上諏訪から通学の生徒には、冬でも外套襟巻(オーバーマフラー)を着て登校は許さない。手袋着用も駄目ということで、割合に自由な校風に育った小学校から、ガラリ変わったのには恐れをなした。どうやら在学中、矯風会にお呼び出しもなく、委員にもならなかった。学校側も、学業成績の良い生徒を、級長副級長に任命し、これを模範生徒とし、教科書以外の文学書を読む生徒は、好ましくない、ともかくも県下第一の質実剛健の中学を目指していたとしか思えなかった。

正直言って、私は息苦しく、他の中学にでも転校したかった。ひとつだけ思い出した。当時、諏訪湖はまだ水が澄んでおり、上諏訪出身の者が、ほとんど占めた水泳部にはいった。六斗川の河口で、水府流の平泳ぎ、抜手を教わり、天竜川口まで、諏訪湖横断した遠泳は忘れない。ただし県下中学の水泳大会で、長野中学の、バタバタ泳ぐ泳法には大敗した。クロールを取り入れたのは、その後であった。戦後、教育制度が変わり、年齢からみて、中学を三年。その上を新制高校としたのは、うなづける。ただし、このため旧制高校が廃止となったことは、今でも残念でならない。

さて時代は大きく変わった。名前も清陵高校となり、男女共学となっている。ところが、校歌だけは、依然として昔のままのようだ。古い卒業生が、東に高き八ケ岳を歌うのは分かるが、今更ああ博浪の槌とりて、でもあるまい。

第一、女生徒があの歌詞では、歌うであろうか。私の出た旧制新潟高校には、校歌はなかった。その代わり、毎年寮祭には、必ず作詩作曲共生徒の手で作られ、八十有余の寮歌が残っている。今でも同窓会、クラス会では、寮歌を次から次と合唱して、自由で多感な青春時代をなつかしんでいる。

そこで、清陵も百年の歴史を持つ時代となり、男女共学になったからには、今迄の校歌は、それはそれで残しておき、改めて作詩作曲は、清陵生自らの手で、新しい清陵歌を一、二と、つくってはどうかと思う。今更有名人や古い先輩なぞに、決して依頼せず、自分達の新しい、寮歌ならぬ清陵歌をつくることをおすすめしたい。ただし先輩から、寄贈歌で、歌詞曲が、あなた方に、気にいれば、受けることは妨げない。

六斗川河口での水泳大会(写真は昭和17年)――「写真でつづる清陵の百年」より

二一世紀のブラジル、中南米と日本

山岡喜久男(34回)

先年(一九九二年)は、国連環境開発会議で三週間、リオ・デ・ジャネイロに缶詰になったが、今回は「世界連邦運動」(WFM、事務局・国連プラザ)との関わりで、サンパウロの市議会の懇談会とブラジリアの連邦議会(外務委員会主催)での講演のために訪伯した。

これに応じた一つの理由は、日本の対外協力や援助が極端に近隣アジアに集中(それは、海外協力事業団や海外協力基金の業務記録でもすぐわかる)しており、それももっともな流れと言えようが、わが国の教育指針は、はっきり国際化とされており、それに則ると、日本の経済活動や協力のコンパスを拡げる方が、相互に、そして世界(地球的隣人社会)を益するだろうというのが、私の胸中にあったからである。儀礼的な点もあるが、講演では、ブラジル、中南米、また日本が世界を益してきたと思われるいくつかの点にふれ、こんごのさらなる協力関係の増強を求めた。

その一。非核(核廃絶)は、日本の悲願だが、そのプロセスとしてきわめて有効な措置として、中南米から非核地帯設定の試みの口火が切られ(トラテロルコ条約)、それが、南太平洋に拡がり(ラトロンガ条約)、さらにアフリカに波及し、本年は、東南アジア非核兵器地帯条約(ASEM・アジア欧州連合会議)に漕ぎつけた。これで北米、EUを除いた全世界に非核の網が敷かれたことになる。

第二。地球環境の劣悪化防止に対する日本の熱意は、かなり評価できる(アマゾン関係支出は全体の第五位)。地球共有財の保全、つまり大気、海洋、森林(アマゾンは全世界の三分の一の酸素供給源といわれる)などの保全には、バラバラの対策ではだめだが、ブラジルの人々の自覚は充分みうけられた。大アマゾンの人類のための管理、保全、開発は日伯協力の大きい課業となり得よう。

第三。いま世界には、民族浄化、民族自決などの名目で大量虐殺がつづいている。民族集団は、世界に五千もあるといわれるが、一八五ヵ国の国民国家の力で仕末がつくものと思われない。日本列島に住まう異民族は、全人口の一%内外なので、民族間抗争の苦難は余り肌で感じられないと思う。しかしブラジルは、全世界の移民から成り立っている国柄でもあって(日本移民は海外での最多、一三〇万人)、民族、人種差別はほとんど存在しない。人類

がこれから「一つの世界」を目指すために基本モデルと言えよう。

おわりに苦言も少し。まずブラジルも含んで中南米における、教育機会の不平等と、それにもとづく貧富の格差の持続という点である。一方、余りにも派手な資本集約的な巨大建設（首都ブラジリア建設など）が財政圧迫を誘発したのは一例。眼を転じて、東アジアをみると、そこでは輸出志向型の成長戦略をとって、ほぼ全階層に収益を分配し、それが所得の不平等性を縮少してきた。東アジア、とくに日本は、今世紀の始めから低所得者でも基礎教育への機会均等が確保され、それが所得向上と経済成長につながった。教育の推進と改革への援助、それが、わが国の中南米に支援可能で、最大効果をもたらす焦点となろう（わたしたちの仲間の一日一〇円運動ですら、中南米にいくつかの校舎を生んでいる）。

それサクセンの林中に

名川　方敏（36回）

今回監事の役を退くことになりました。長い間監事を努めましたが、その間大過なく無事に過すことができましたことを感謝いたします。

＊

去る六月一二日より一〇日間、級友の金原昌夫氏のお誘いで、一橋大学OBの一行に加わり東ドイツを訪ねて来ました。

フランクフルトより、いわゆるゲーテ街道をアイゼナッハ、イエナ、ワイマール、ライプチッヒ、マイセン、ドレスデンと廻りました。

東ドイツは西ドイツに較べて経済的に遅れをとっていたようですが、現在ではかなり復興して、西ドイツのレベルに近づいて来ているようです。

ドレスデンは人口五十余万、エルベ川に沿った美しい町です。ドレスデンはサクセン（ドイツ語ではザクセンと呼びます）の中心にあり、かつてポーランドに属していたのですが、境を接する北方のベルリンを中心とするプロイセンのドイツと戦い敗れてしまいます。この時のドイツ軍の勢いはものすごく、ドレスデンを席巻します。

母校の校歌「東に高き」の最終節、「それサクセンの林中に、ドイツの国の力あり……」はこの時のドイツの軍勢のような、ものすごい勢いと気力を出して、我々も勉学に頑張ろうじゃないかと謳ったものです。

ドレスデンへ向う観光バスの車中で、校歌のこの最終節を金原氏といっしょに、声高らかにうたって来ました。気分は最高でした。

大門峠に因んで

岩波　信之（48回）

諏中四八回生の東京の集いを「白樺会」と名付けて、毎年春に例会をもつことにしており、私はその世話役の一人となっている。

このいくらかロマンチックな、またかつての文芸同人の匂いさえしそうな会名は、戦時下の勤労動員による汗と土にまみれた、大門峠の貯水池堰堤造りに因んで付けられた。

霧ケ峯の奥にある白樺湖は、四季を通じて、山のリゾートとして親しまれているが、元は食糧増産のため、音無川を堰き止めて造られた貯水池で、当初「蓼科大池」と呼ばれた。この貯水池造成工事に当時三年生の我々が動員され、山中の電灯もなく吹きさらしのような宿舎に合宿して、連日トロッコの土運びに苦闘したものだった。この時の思い出が強烈で、昭和五十年代に同期生の会を持とうという時に、期せずして会名を「白樺会」と名付けた。しかし、せっかく発足したこの会も、その後はほとんど開かれることもなく十数年が過ぎてきた。

蓼科大池（現白樺湖）工事への動員（昭和19年）――同書より

そんなおり、母校創立百周年のいろんな記念行事の盛り上がりをみて、この機に我々も同期の会を再開しようと、平成七年三月に集いの呼びかけをしたところ、三十数名の人が集り、大変に盛会となった。まさに卒業以来の再会の人もおり、大門峠の苦楽に始まり、伊那の飛行場、終戦直前の工場動員と、懐旧談に花が咲き、また人気のあだ名の先生の思い出に話の尽きぬ宴となった。最後は校歌の斉唱である。「東に高き」に始まり「理想の花の咲かむまで」と歌い終った時、あの夕日に映える大石の前で幾度となく歌った昔を思い出し、感慨ひとしおであった。そして今年も四月、諏訪在住の人も交えての会は昨年にも増して一段と盛り上がったものだ。

昭和一七年四月某日の新聞の戦時一色の記事の横に、新入学の我々二一五名の名前の載っているコピーを見た。現在、その半数近い人が東京周辺に在住している。齢六十半ばを過ぎてなお現役の人も多く、また余生を趣味に生きる人、病に立ち向っている人とそれぞれであるが、みな清水ケ丘の日々に尽せぬ想いを持っているのが感ぜられる。

私も今は、かつての仕事の中で身につけた知識を生かして、多少の社会奉仕をしながら、ドライブにゴルフにと楽しんでおり、病い知らずは、かつての徒歩通学で鍛えたお陰かと思っている。

昨年一一月、母校百周年の記念総会のおり、新しい学舎の庭に立って、諏訪湖を一望した時、身震いするほどの感慨を憶えたものだった。先頃、記念刊行された『写真でつづる清陵の百年』は、数多くの貴重な写真とともに適切な解説がなされており、実によく編集されている。まさに母校百年の歴史の流れが把えられており、関係者の労を多としたい。

その中の写真の一枚に自分の姿を見つけて、「おお、出ている」と懐しくも喜んだものだ。

ボランティアと双樹会

大谷　溥（52回）

五〇歳の冬、遭難寸前のビバークをした。予想に反して会社や仕事は現われなかった。子供・妻・友人、何を大切にすれば良いかが分った。

「自分のために、自分らしく」という生き方を求めた。数年の試行錯誤を経てボランティア活動を始めた。今ではそれが生活の座標軸になっている。

「いのちの電話」は私のボランティア活動の原点と言える。研修二年間、修了認定の電話実習は酷評ばかり。「もう退めよう」と最後のチャンスに臨んだが、やっぱり大谷流が出た。「良いのよ。大谷流って大谷さんらしさでしょ。プロじゃないのよ、隣人の大谷さんでいいのよ。相談員が全員同じ事言ったらオカシイわよ」。このH先生の一言で救われた。

昨春、阪神ボランティアを体験して毎日を快適と思う精神状態になった。客観的には必ずしも幸福な老後とは言い難い。しかし、この先どんな事態になっても、決して自分で自分を惨めにすることはないだろう、との思いは強くなっている。

それは一言で言って自己受容の拡がりだろう。「いのちの電話」や病院・施設での心病む人たちとの関わりの中で、人間とその心の在り様を教えられ人間観を拡げて来た。

しかし、そこには順調に陽の当る処を歩いて来た私、理性で物事を見、考える私がいた。だから何処かに「そうは言っても…」との思いがあった。

阪神では打ち拉がれた人々の中で、打ち拉がれて声を出せない私がいた。今までの共感・受容を超える次元での共に苦しむ体験――受苦能力の芽ばえがあった。それ以後、「そうは言っても…」という囁きが影を潜めた。

もう一つ快適な世界がある。清陵同期「双樹会」である。最近は諏訪にならって、東京でも月一回、「扇寿し」(東京駅八重洲口)に集まる。誰が来るのか決っていない。誰が来るなら…、今度出ないと…、とかは一切考えない。出たいから出る、というのが何とも気持が良い。

百周年を機に「哀悼基金」を設けた。一口五千円を一人一口以上、不足が予想されたらその都度、拠出要請が来ることになっている。これまたボランティア団体的で、私は気に入っている。記念誌「あゝ信山の」を作った。林が言い出しっぺで彼なしには完成しなかっただろう。その事を分った上で、作成に関わった者、原稿を書いた者たちは「俺の協力で出来上った」と、決して特定者を絶対視しない。

心地良さを挙げればキリがない。その源泉は信頼感と安心感だろう。

私のボランティア活動のために募金をお願いしている。協力者も多いが応じてくれない友もいる。恥しい話だが当初はその事にこだわり、わだかまる私がいた。暫くしてそれは「友情を担保」にした行為だと教えられた。

ドップリ、ボランティアの世界に浸かっているが決して〝馬鹿〟――身勝手で大事なことが見えない――にはさせてくれない。今も私は、級友たちに育まれているのだ。

親の子離れが悪くなっている？

海野　肇(63回)

清水ケ丘を離れたのが一九六〇年、高校生活も遥かな過去になった。清陵時代、個性豊かな先生方のライフスタイルに一種の共感があった。それが自分の今に繋がっているかもしれない。

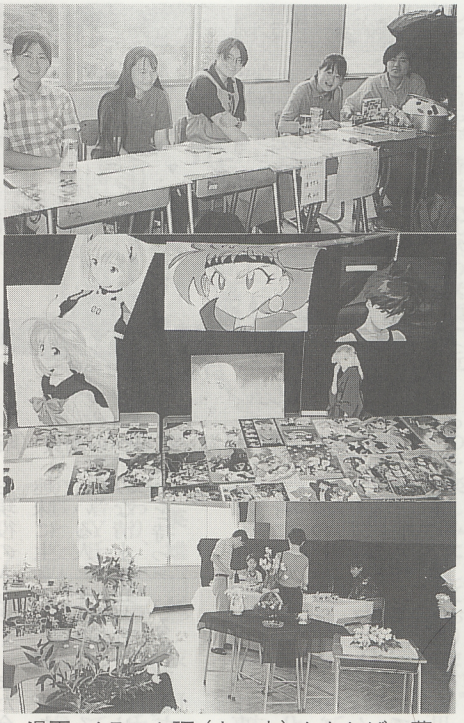
大学の研究室は世の中の変化を写す小さな社会と思う。研究の中味ではなく、研究に関わり研究室を通過して行く若者たちを通してである。彼等は次世代へのメッセンジャーである。研究室の学生たち全員に個人表というものを毎年提出させている。ここにある主義・主張・人生観の欄の記載について、久しく気になっていることがある。

留学生は男女を問わずほぼ全員が、確固たる主義主張を記載している。いずれの国からにせよ異国で勉学をするには、それ相当の覚悟と展望を持っているはずで、当然とも思える。日本人男子学生の九割はこの欄に何も書かない。戦略的に意図しているのではなく、書くべきものを持ち合わせていない、というのが真相のようである。

一方、日本人女子学生達は明らかに異なっている。(東京工業大学で)生物化学工学という分かりにくい講座名を掲げている私の研究室では、工学という言葉の故にか、留学生を除くと、これまで女子学生はそれほど気になる存在ではなかった。ところがここ二～三年は様変わりである(清陵高校でも一九六〇年代にはクラスに一名いれば神様のような存在であった女子生徒が、いまやクラスの半数をしめ、完全共学になったと聞いている)。彼女らは全員が主義主張を明確に述べている。目標も確固としている。そして、研究に日常生活に、学生達のイニシアチブを取っている。思うに、男子の幼弱化現象が進行しているのではあるまいか？研究室という小さな小さな窓を通しての予感である。

最近この予感を裏打ちする話を耳にした。いわく「国家公務員の採用で来年は確実に女子が半数を越えるだろう。最近の男子は与えられた仕事をスマートにこなすが、その先が出てこない。決断を下し、イニシアチブをとるのは女子であり、男子はそれに従っているだけである」。さらに「雇用機会均等法施行一〇年になる。現実は女子にとって決して機会均等ではない。何をするにも男子より実質数倍高い障壁を越えてきている。男子より数倍考え、数倍の努力をして、ポテンシャルを稼ぎ、成長のチェックポイント毎に自己を点検し、生き残りをかけている」と。

一〇年後の社会は女性を軸に大きく変化しそうである。良い悪いの議論をするつもりはない。女性の進出は歓迎すべきものと思っている。ことは、男子の幼弱化が本物であるならば、それは食い止めねばならない。生物としての役割分担を全うしつつ、拮抗、切磋琢磨してこそ、強力な社会構成員となるはずである。文字数がつきたので結論を急ぎたい。ことの根源は家庭の親の教育観にあるのではないかと感じている。男の子をあまり大切に扱いすぎたのではないか。我が子の自立を促す役割を忘れた親達の、(男の)子離れの悪さが、災いしていなければ良いがと願っている。



漫画・イラスト研(上，中)もあれば，華道部もある(96.7清陵祭)

少年老い易く？

岩間　建亜(63回)

昨年はじめて東京清陵会に出席して、少々あせりをおぼえた。もともと記憶力は悪いほうだが、それにしても、同期生はおろか、同級生の顔もさだかでないとは。

一九六〇年に卒業して三六年が経つ。以来はじめて会うのだから、無理もないと慰められても、たった二七八名、三年間一緒だったのだから忘れるはずがないという思いの方が強かった。しかし、同期というのはいい。特に、仕事がからんでいないところがいい。しゃべっているうちにアブリダシのように、当時が思い出されてくる。向こうが忘れていても、こっちが先に思い出すということもあって、かまわず、しゃべり続ける。そのうちに、「おまえ、もっとずっと小さかっただろう」などと、アブリダシてくれる。三年の二学期まで、全学で一、二に小さかったこと

を不意に思い出してくれるのだった。

在学中、天文部に籍をおいていた。民間では七カ所のうちのひとつとして、太陽の黒点観測が、東京天文台に登録されていたわが清陵。そのこともあって、夏休みにも冬休みにも交替で、当時は屋根から飛び出したドームでの黒点の記録に登校したものだ。天文部で毎夏、水場の悪い守屋山にキャンプしたことも、いまはなつかしい。

そのほか、卓球部に顔を出しては、あそんでもいた。部員が少なく、実力もなかった卓球部の、員数合わせをただ歓迎されてのことだったと思う。

ともかく、勉強のことなど、ほとんど記憶がない。数学も英語も、入学数カ月で見切りをつけたような気がする。はじめに努力した者は、あとでの努力はいらないだろうが、わたしの場合、社会人になって、どれもこれも、相当な努力が必要になった。しかしながら、必要に応じての勉強が、わたしには性に合っている。日々これ勉強で、けっこうたのしんでいる。と書くと、優秀な清陵生からは、あるいは非難を受けるかもしれないが、清陵時代に勉強した仲間は、やはりそれなりのポジションにいる、と言いたいだけである。

学生時代に怠惰だったわたしが、編集や広告の仕事のあと、やりたいことを見つけたのは、ようやく二〇年前である。作家・落合恵子が主宰するクレヨンハウスという絵本専門店の創設に出会って、あとは一途に、子どものことに関わってきた。父親や長兄が教育者だったことから、教育関係から逃げていたにもかかわらず、いまの指向は、ひたすら、統合教育やエデュテイメント（Education+Entertainment）である。子どもからの視点で、世間を考え直している。また、生涯学習のことにも大いに関心が向く。高齢化社会に自らが仲間入りすることも当然ながら影響しているのだと思う。

子どもの視点で考えだすと、自然に、子どもの心やからだに、どんどん目が向きだした。そんなことから、子どもに関するデータブック『月刊子ども論』、エデュテイメント・マガジン『月刊クーヨン』の出版をはじめた。自分でやりたくて、編集長を一〇年間、譲らずにいる。

子どものアトピーやアレルギーが気になりだすと、現代の食事について考え直すようになった。その結果、安全な食事を、より完璧にしたくなって、自然食の八百屋と自然食レストランをはじめた。いま考えているのは、エデュテイメントの学校のある、有機農法の農場。やりたいことが、次々とやってくるのに、ふと気づいてみると、五四歳である。清陵時代に勉強していれば、こんなに遠回りしなかったのかもしれない。そんなことを考える昨今である。

「理想の花」ふたたび

春山（旧姓・薛）明哲（68回）

「思ふに諸君が母校に在るの日、学窓の下　時に読書に耽り、或は思慮に沈み、若くは互に談笑遊戯、嬉々として娯楽せるかの如き往事を想起しては、又幾多の感慨なからすや」――明治三六年一二月、諏訪中学校『学友会誌』発刊の辞から――

一九八一（昭和五六）年五月のあの日、端艇部員達が捧げる交差したオールの間を牛山正雄先生の柩が粛然と進むのを眺めながら、「僕の清陵」は終わったと思ったことを鮮やかに憶えている。「うしまさ」は僕にとって清陵のほぼ全てを象徴するものだったし、その一端は『理想の花の咲かむまで』に書いたので、もはや「往事を想起して、幾多の感慨」に耽ることはないだろうと思っていた。しかし今回の寄稿依頼を期に『写真でつづる清陵の百年』を読み、ビデオ『清水ケ丘にうたう』を見てみると、ふたたび「近代日本における諏中とは」、「清陵の理想とは」という問いかけが僕の心に浮かんできた。

「千万人」といい、又自治あるいは質実剛健といい、今となっては不思議なことに思われるのだが、清陵には強烈なアイデンティティがあった。その根底に流れていたのは、僕流に表現すれば「理想主義に溢れた郷土ナショナリズム」とでも言うべきものだったと思う（「談論会」の場なら、ここで一斉に「シーッ」とブーイングが起こるところ）。

私事になるが、僕は本来「郷土ナショナリズム」からもっとも遠い異邦人のはずだった。なぜなら、僕は生まれも育ちも日本であり母も「金色の民」たる大和民族だが、父は台湾の高雄出身であって、遠く父祖の地は中国大陸にある（ひょっとすると「第二校歌」の碑が建立された河南省原陽県の博浪沙ということだってある？）。そしてまた、僕は中学二年の秋に東京から富士見町に移ってきて、上諏訪中学校を経て昭和三七年に清陵に入学したので、信州人でもなければ諏訪大社の氏子でもない。

ところが、こんな「とつくにびと」に諏訪の地と清陵は、素晴らしい友と師と風土とを与えてくれたのである。多分あの頃「理想の花」が馥郁（ふくいく）と咲いていたのだと思う。

このあたりで思い出したことなど。

『清陵の百年』に昭和四〇年の「蛍光灯設置運動」の記事と決議文が載っている。二年生の時、僕は学友会長名取與平君のもとで書記長だったが、教室があまりに暗いので保健委員長の小松順一君とはからって、蛍光灯の設置を学校当局に求める運動を起こした。次の学友会長選挙で出馬した僕は藤森照信君に見事惨敗したが、彼がこの運動を引き継ぎ、ついに卒業直前に全教室に蛍光灯がついたのである。畏友藤森君とはこれがきっかけで付き合うようになった。ファイヤー・ストームの泥を彼と流し清めた「地研」の前の水道も、あの蛍光灯も、新校舎の建設で今は無い。

しかし、諏中の設立経緯、中島喜久平らの活躍、小平権一の「同志舎」の記事などを見るにつけ、無形の伝統と精神こそ継承されうるのかも知れないと思ったりする。

僕は今、国立国会図書館に勤め、日本国民の文化財たる出版物の収集・保存の仕事をしている。無形の伝統と精神を後世に継承する条件のひとつは、それらを有形の資料に定着し保存することである。もし、諏中・清陵の同窓諸先輩後輩が流通市場に出にくい出版物を刊行作成された場合には、ぜひ、寄贈か納本をお願いしたいと思う。それらの書物はいつの日にか「学窓の下時に読書に耽り、或は思慮に沈み」する若人に出逢うことだろう。皆様のご健勝をお祈りし、これからも清陵の「理想の花」が咲き続けることを願いつつ。

蛍光灯設置への学友会決議文
（「清陵新聞」昭和39年）

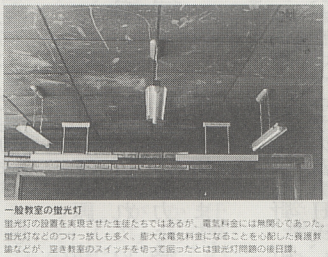
決議文

昨年以来蛍光灯設置の声が、生徒間からも盛り上がった。それにもつかわらず検討長からは、金が無い、という理由で拒絶された。しかし我々のこの切実な願いは金が無いだけでは最早片付けられない。我々の生活に密着し常に我々が身をもって感じている事柄を、教室が余りに暗すぎる、という事は、このまま見過ごす問題ではない。

現に最近の保健委の調査によれば雨の日の屋下側の一〇メタス教室中央20メタスである。文部省保健審議会で規定されている天候に関係なく教室が150メタス、視力で100メタス以上には到底及ばない。このデータを見れば自ら分るように我々は全く盲目同然の所で生活している訳である。これでは視力減退を訴える人が多くなるのも無理ない訳である。諏陵では、去年の統計によれば目の悪い人が三六人、四〇%にもなる。これは年々増えつつあり、悪い地盤に対する予想以上の悪い状態である。我々は、これに対し、熱心に勉学に励もうとしても、現状はこれに反する。雨がなく健康な状態になる一方である。我々には最早これ以上良視出来ない。どうしても暗い環境の下で、勉強により増強を促進させ、勉強を促進させるために、全ての教室に充分な照明設備が設置されることを訴える。

「丁寧がない」…これだけの言葉で、我々の健康を犠牲にされてはたまらない。我々は如何なる困難に合うとも、蛍光灯設置を実現することを決議する。

学友会　藤森照信



一般教室の蛍光灯

蛍光灯の設置を実現させた生徒たちではあるが、電気料金には無関心であった。蛍光灯などのつけつ放しも多く、膨大な電気料金になることを心配した資源財論などが、空き教室のスイッチを切って回ったとは蛍光灯問題の後日譚。

化学実験室の蛍光灯

「40%の人が目が悪い」と――「清陵の百年」より

三行短信

矢崎　猶重(28回)　旧　永　明
「山本喜市と諏訪の体育」拝見、わが国初のスケート技術書『氷滑術初歩』初版が、小生の生誕と同一年だったとは。

名　取　亮(29回)　富士見町
高齢となり特に感じる事、第一に健康に注意、次に生涯何か特技を一つ身に付けておく事、必ず生き甲斐になる。

中島　和市(30回)　川　岸
同級の故藤森栄一君の名著『銅鐸』は彼と松本清張の『断碑』の主人公森本六爾との交友を物語っていて興味深い。

三井　嘉延(30回)　富士見町
地球破壊、人口増加、食糧不足をどうするか？この解決策と、行動こそ、新しい時代の新しい価値観である。

和田　光夫(30回)　富士見町
友より黒枠の端書多くうたゝ感無量。幸い健康に恵まれ趣味の囲碁と頭脳の潤滑油程度の仕事を楽しむ今日此頃。

今村　義雄(31回)　辰　野　町
一昨年、孫の車で清陵高校拝見、立派な学舎で驚きました。入学時の旧制諏中を懐かしく想い浮かべました。

島田　喜仁(31回)　上　諏　訪
政・官・財界の目に余る現状。今こそ若い世代への交替による旧体制の大改革を断行しない限り、二一世紀は大変だ。

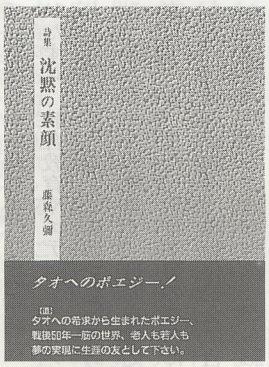
山田　六一(35回)　長　地　村
貧しい時代、またボロ校舎だったが、よき先生よき友人に恵まれ、人生で最高の時期だったと思う。感謝あるのみ。

米澤　義槌(35回)　上伊那中川村
釈迦もキリストも生存中にその法を聞いた人は稀。大川隆法が釈迦の生れ替りとして人類救済の「神理」を説く。

小口　達美(36回)　岡　谷　市
諏中思い出。旧い校舎。個性豊かで教育熱心だった恩師達。戦死した級友達の元気溢れた往時の面影。夢多き日日。

菊池　義長(36回)　原　　村
諏中卒後六十年、船乗り、先生、海上自衛官、大企業役員等、流転人生も、「千万人と雖も吾往かん」の気概と、諏中時代の強い絆で終始努力でき感謝。

藤森　久彌(36回)　上　諏　訪
戦争・戦後の生き残り。二〇代で陸軍病院から生還して、老子のタオとはなんぞやと追究。詩集『沈黙の素顔』(近代文芸社)を発刊。



渡辺　隆夫(40回)　上　諏　訪
昭和一四年頃、運動会で諸先生の似顔絵をプラカードにして回った。一番人気のあったのはエンタツ先生でした。

小口　眞(41回)　上　諏　訪
四月不惑会(四一回同期会)の観桜会を弘前公園で、五月ゴルフ会を晴が峰で開催。春の叙勲で飯島君勲一等受章。

三枝　正治(41回)　岡　　谷
いじめ、わが子供時代にも。陰湿でなかったし正義漢もいた。こんなになったのは、拝金主義の躾をした親の責任。

小宮山　実(42回)　岡　　谷
混迷する世相を見ては国の将来が心配。清陵が今後も優れた人材を数多く育んでくれるよう切に願っています。

樋口　幸雄(42回)　長　　地
米国と戦争及び戦後貿易を経験。二次大戦敗退後半世紀、なお米軍駐留中。今や米軍無しの対等の立場で友好を！。

山田　一次(42回)　辰　野　町
「麻酔醒め　傷跡疼き　ひたすらに耐えし病床　白々と明く」――慈恵入院、右膝半月板切除手術、経過順調。

今井　五十二(43回)　下　諏　訪
毎年、蓼科での思山会ゴルフ会に家内(二葉卒)と共に参加し、青春時代を語るのを楽しみにしております。

岩波　正雄(43回)　下　諏　訪
年毎に会員が増え盛大に行われている総会。当番幹事の方々のご努力と感謝します。会員のご健康を祈ります。

栗林　英雄(43回)　辰　野　町
水魚の交わり、マニラの富豪H氏、天津の実力者Y氏と六月末天津にて一夕歓を尽す事となり、土産品を思案。

鮎澤　眞澄(44回)　上　諏　訪
湖周マラソンゴール寸前スピードダウン。吾を待つ彼、高橋新造君。二人優勝。清陵は青春の泉。想い出無尽。

花岡　季彦(45回)　湊
諏訪の風土気質が変った。郡内一市二町二一村に甲州伊那の俊英を取り込んだ基盤が三市二町一村体制に埋没か？

林　克典(46回)　岡　谷　市
四六回生は戦争中の卒業で卒業証書は勿論、アルバムもない。そこで今年は同期会アルバムの作製を始めました。

増澤　喜美夫(46回)　長　地　村
本部・支部(東京)の同窓会開催は、心のよりどころを求め、母校を考える機会として、たいへんありがたいです。

下平　政信(47回)　下　諏　訪
千万人と雖も吾往かん――この暗い世相の今日、座右の銘として、破邪の利剣を振るい、正しい道を進んで下さい。

原　尚道(47回)　湖　　南
入学した年開戦で、卒業した年終戦と、爾来経節老(螢雪功)成りて、万里の長城・百周年、何時まで校歌を歌うやら。

矢嶋　国夫(48回)　下　諏　訪
会社をやめて暇になったもんだから、いま一生懸命ゴルフの練習をしている。同期生でのコンペが楽しみだ。

湯浅　宙俊(48回)　上　諏　訪
湖山に囲まれた母校の五年間は戦争なかりせばどんなにかと思う反面、勤労動員の汗に懐かしさも感ずるこの頃。

宮坂　松衛(49回)　上　諏　訪
私どもは諏訪中学を終戦直後に出て、今は定年退職の年(六五歳)に。友人の何人かはすでに亡い。御健康を。

関　悦受(50回)　上　諏　訪
昨秋、清陵百周年の行事に参加、変わり行く清水ケ丘に感慨無量。現在、都体協理事としてスポーツ振興に尽力中。

波多野　里望(50回)　上　諏　訪
昨年はガンのため胃の下半分を切除。でも全快してビールもゴルフもOK。今年は国連に三回も行く忙しさです。

宮坂　弘三(50回)　上　諏　訪
日本アジア航空で頑張っています。台湾への旅行の際は御利用下さい。時々校歌を放吟して若さを保っています。

今井　公彦(51回)　岡　谷　市

三行短信

過日五一回生による戸沢君の「明治大学長就任」の祝会。一業を専とし継続する事の重みを痛感した一夕であった。

堀内 昭八(51回) 富士見町
在校時の体力づくりが今に生きる。体力、気力なお横溢。本年、会社設立。小生、湖周マラソン新記録第一位。

守屋 政事(51回) 高遠・藤沢
校歌の中に守屋の字あり。杖突峠を越えて入学。皆、予・復習を行うのには驚いた。勤勉の伝統を守って欲しい。

新村 武治(52回) 辰野町
還暦を過ぎ、懐旧の念一入(ひとしお)に友垣の俤(おもかげ)恋し…戦後の学制激変期に集うた、紅顔多感の少年時代を偲び繰りながら。

矢崎 光保(52回) 四賀
双樹会の例会、東京版に集合!。毎月第三月曜夜六~九時迄。日本橋の扇寿司で旧友を俎上に笑談。幹事に一報を。

牛山 久男(55回) 玉川
職場から歩いて五分の恵比寿ガーデンプレイス。ヨーロッパ的な雰囲気を楽しみながら週二回ぶらついています。

伊藤 力司(56回) 玉川
最大の関心事は二一世紀の米中関係。太平洋が文字通り平和の海であり続けるか。そのために日本は何ができるか。

小林 義久(56回) 岡谷
清陵出て二〇年今じゃ——当時コンパで将来を歌う、はや還暦過ぎ毎年同級会盛況、初入学のお嬢とごたっ小僧で。

大坪 靖(57回) 富士見
先日個展のスケッチにシシリー島行。地中海文明を偲ばせる遺跡が散在、自然と文明の豊かな共存に一驚した。

佐野川 日出雄(57回) 玉川
脱サラ二十数年。定年のない幸せを感じている。人生七掛け時代? 真の定年七五歳まで走り続ける決意です。

中澤 澄行(58回) 上諏訪
毎年八月一四日には、清陵の仲間達と、ちの駅に集合して、山に行くことに決めている。楽しきかな仲間達。

山田 伸一(58回) 長地
還暦なんのその、近くのプールで1コ、五本を含む千数百メートルを週二回標準体重維持! くたばれ不整脈!

宮川 良一(59回) 岡谷
入学後四十余年、永かったか一瞬の間かよく分らない。あとはゴールに向かってエンジョイできるかどうかの運。

篠原 健(60回) 上諏訪
同期生は定年が近づいて、ほとんど勤務先が変わりました。私も生保会社から損保会社に転身となりました。

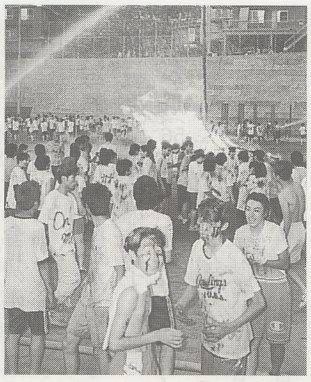
高砂 智之(60回) 下諏訪
諏訪湖マラソン・放歌高吟コンパ・青春の一コマであったが、後年の人生のよき滑走路であったと今しみじみ思う。

浜 勝彦(60回) 茅野市
従来の日中関係は上下、やるやられるの水準だった。対等の関係に耐えうるか、足元を考えるこの頃である。

小林 和男(62回) 玉川
二一世紀、我々はどんな世界に住むのか。その予兆を見る番組「NHKスペシャル・二一世紀への奔流」を担当。見て下さい。

長田 宏子(62回) 茅野市
「あずさの旅」も帰省より旅行が多くなりました。自然に恵まれた信州で学べたことを今後も大切に、生活したい。

小川 忠男(63回) 富士見
「清陵だより」に、高校時代が今でも鮮やかによみがえります。四月から新しい環境で仕事に取り組んでいます。



樋口 信也(63回) 伊那
出版社に入社して三一年。二九歳から始めた辞書編集の仕事で既に二五年が過ぎた。文化書局や花松館が懐かしい。

日向 明房(63回) 山梨
二八年間に及ぶ東相銀勤務から、「淡島ホテル」の営業に移りました。この先五年くらいはがんばるつもりです。

宮坂 昌輝(63回) 上諏訪
(財)工業所有権協力センタで特許関係の調査業務を行っています。最新の技術開発の動向が把め面白い仕事です。

矢崎 正彦(63回) 四賀
政治や行政、経済の行方が問われている時、司法のあり方も無縁ではない。心して職責を全うしたいと考えます。

海野 光三郎(64回) 小淵沢
ワープロ自ら打てず、男は結果だ! そんな理屈で、ナイスバディの姉ちゃんの脇で「♪触れ合う膝の悩ましさ」なんて歌、教えてる。

仁科 眞爾(64回) 辰野町
歴史は流れるものでなく積み重なっていくものと聞いたが、清陵出てから三五年、何の蓄積も無いのに愕然とする。

花岡 淳(64回) 湊
三年間の短い高校生活、なぜか人生に長(おお)きな影響力があった。すばらしい母校・先輩を持っていつも勇気づけられる。

進藤 瑞穂(65回) 上諏訪
昨年一一月に清陵百周年記念行事に参加しました。諸先輩が営々として築かれた歴史の重さを痛感しました。

平出 武人(65回) 境
六月五日集う。宴進み場は「故郷の訛懐かし停車場」となる。タイムスリップしそこには青春がある。多謝健康。再見。

五味 洋(66回) 宮川
多摩美大を経て、広告代理店にて、商品が売れない時代の広告宣伝・販売促進のプロモーションとは! を深耕中。

宮坂 秀一(69回) 下諏訪
異業種に転じて自分との闘いの毎日ですが、同時に人間として根元的な問題にも、思いを致すようになりました。

吉川 仁(69回) 川岸
各地で住民主体で進める防災まちづくりや、地震に強い都市づくりを手伝っています。諏訪は大変気がかりです。

小口 隆夫(70回) 下諏訪
清陵卒業して三〇年、仕事に追われ自分を見失いそうな毎日ですが、これからは少し余裕をもちたいものです。

両角 修次(77回) 富士見
奥多摩に最寄りの地で家族で自然に分け入り楽しみ研究。仕事も地球環境を考慮。故郷の自然にも思いをはせて。

両角 英幸(85回) 上諏訪
清陵卒業後一五年になります。平々凡々の生活をしていますが、何か形に残ることをしてみたいものです。

300人余、校歌の大合唱

―95年度・第二九回東京清陵会総会―

「東に高き八ケ岳…」が三一七人の大合唱で、第二九回東京清陵会総会（諏訪中・諏訪清陵高同窓会東京支部総会）は、会場を揺るがす盛り上がりをみせた。

母校百周年にあたった九五年の東京清陵会総会は、諏訪での一一月の記念総会のため例年より一カ月早い九月一三日、港区の虎ノ門パストラル鳳凰の間で開催された。式では、初の女性司会・岩崎信子さん（当番幹事62回、信越放送アナウンサー）で、開会あいさつは青木孝弘・幹事代表が、「母校百周年にあたる記念すべき大会に、三百人を超す会員が結集され、母校との絆を一層深め、東京清陵会として母校の発展にさらに寄与できる組織としたい」と述べた。

この一年間に亡くなられた井内勇氏（21回）ら二九人のご冥福を祈り、出席者全員での黙禱につづき、小平祐会長（42回）が「百周年記念とあって、これまでの総会では最多の出席者となり、今後の東京清陵会の結束を強めよう」とあいさつ、諏訪からかけつけた小菅重男同窓会長（45回）、新しく就任した松下勲清陵高校長（59回）などの来賓も、「百周年記念事業への東京清陵会の力強いバックアップを感謝し、地元での記念祭にぜひご出席を」と語った。

総会議事は小平会長を議長に選出して事業報告は林尚孝・事務局長（52回）、会計監査報告は名川方敏・監査幹事が行い、満場一致で承認されたが、会費の納入、住所不明会員の確認など今後の検討問題などもあげられた。

祝いの鏡割りは宮坂醸造から寄贈された「真澄」の樽に渕上良子・本部同窓会副会長（56回）、小口禎三・前東京支部会長らが、掛け声も力強く木槌を入れ、乾杯の音頭は小松誠・東京清陵会副会長（42回）が「諏訪人の力意気のシンボルでもある諏訪中・清陵スピリットのさらなる結びつきを」と大発声。

アトラクションは、前田由美子さん（62回）らの女性カルテットによる琴演奏（**写真下**）で、「コンドルは飛んで行く」など琴によるラテンミュージックも魅了。二〇人を超す女性会員の意気を高め、二月の「東京清陵会第一回女性の集い」の輪の強さも示していた。

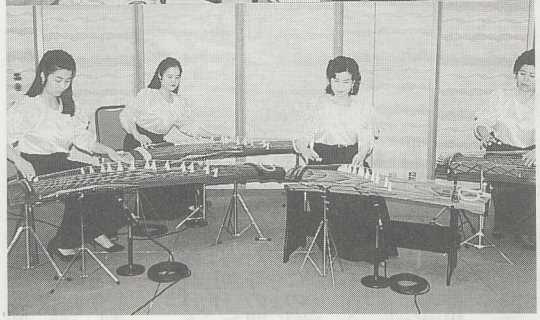
会場は三百人の出席を第一目標として、二〇年来の神宮外苑の東洋軒（日本青年館）から広い虎ノ門パストラルに移したこともあって、会員懇談は各テーブルで盛り上がり、バイキング方式の料理もメニュー豊富で好評。鏡割りの樽酒も売れ行きは上々となった。

本部同窓会の小口祐一事務局長（47回）が「秋の百周年の記念祭で地元は講演会、音楽会、美術展と盛り上がりをみせている。ぜひ、帰省して参加して下さい。東京清陵会の皆さんの力強い声援をお願いします」と呼びかけ、校歌斉唱は、長門肇幹事の指揮のもと62回生は全員壇に上がって、会場に張られた「清水ケ丘で会いましょう」の横断幕も揚げての、大合唱で会場がわいた（**写真上、中**）。

閉会の辞は、次回当番幹事の藤森宏一代表（63回）が「本日は63回生から六〇人を超す大動員をかけた。来年もぜひご参加を」と力強く呼びかけた。

母校創立百年の節目とあって、東京清陵会も女性の第一回集い、会報の特集、ビデオ「清水ケ丘にうたう」の制作・販売に協力と、今総会の準備に当番幹事として慌しい一年であったが、電通・早川次彦氏（61回）デザインの百周年記念テレホンカードの全員配布、そして母校には幹事回生・藤森汎君制作のブロンズ「蒼風」も寄贈して、幹事の大役を十二分に発揮できたと自負し、あらためて小平会長はじめ会員各位のご配慮を感謝しています

（62回生幹事・中谷範行記）



女子会員、大いに語る

第二回女性のつどい

東京清陵会の第二回女性のつどいが八月二二日午後六時から新宿のホテルサンルート東京で二十名の参加を得て開催されました。

寺島敏郎副会長の挨拶、三〇回記念総会当番の藤森・降旗両幹事の総会案内、渕上良子同窓会副会長の開会のことばのあと、参加者全員のスピーチがあり、五六回生から八七回生という年齢差を感じさせないなごやかな雰囲気の二時間となり、校歌斉唱でしめくくりました。

つどい出席のため初めて自分のためだけに、しかも夜、外出した専業主婦、老人介護に、子育てに真っ最中の人、開業の報告、清陵時代の思い出、長い教職の現場から見た親たち、子供たちの変化や苦労話、清陵野球部の地区予選観戦談など多岐にわたり、それぞれのスピーチには、励まし、声援の大きな拍手が起きました。

出席者の皆さんからは、この会に出席すると、希望あふれた清陵時代に戻って明日からまたがんばろうと勇気が湧いてくるという感想をいただきました。

女性会員は、現在50回台一五名、60回台四一名、70回台六三名、80回台一一五名、90回台三三名の合計二六七名の在籍者数です。今後も年一回のペースで開催する予定でいます。皆さんのご出席をお待ちしています。

（77回　西村いづみ記）

二世紀目の初総会、新体制でスタート

平成8年度(本部)定期総会

平成八年度同窓会定期総会は六月二三日(日)、諏訪シティホテル成田屋で開催された。参集者は、三四回生の大先輩から八三回生の若手まで約一五〇名。昨秋「学校創立百周年」の大事業のあと、二百周年に向けてのスタートの意味を込めての総会でもあった。

冒頭で、小菅重男会長は「百周年」にふれ、「記念事業も式典も成功裏に終了した。それぞれに工夫をした事業ができたと思っている。かかわった多くの同窓生や関係者に改めてお礼を言いたい」と、謝意を示したうえで、「母校も新しい世紀を迎える。新しい心を育てるには(同窓会も)新しい在り方を模索し、配慮を施していかなくてはならない」と、会長退任の意向とともに新体制への期待を述べた。

各種議事が承認される中で、特に、同窓会の財政状況が悪化していることから、入学時に納入する終身同窓会費を、現行一万円から二万円に増額する件、および役員改選・新体制(後記)も了承された。

総会終了後、記念講演会が催され、「釣りバカ日誌」の原作者・やまさき十三氏が「釣りバカ日誌と私」、今総会当番幹事の六三回生で現在小学館編集部に勤務し、大学時代からやまさき氏とは〝悪友〟の関係にある武居俊樹氏が「釣りバカ日誌と清陵高校」と題し、トークショウ形式で互いに歯に衣着せぬ言葉を交わして、満場を沸かせた。また終了後の質疑応答では、「漫画のなかで諏中ボート部の話が出てくるが、絵に間違いがあった」、「第一作は絵が下手だったが、なぜか」など、鋭い指摘も飛び出して、壇上の二人も肝を冷やしたようだった(**写真上**)。

また総会の席上、当番幹事の六三回生(松木義文代表)と次年度幹事の六四回生(小松修治代表)から、母校へ新しい校旗の寄贈が行われた。

六三回生による総会開催準備は、一年半ほど前から逐次進められていたが、そのなかで「母校の校旗が古くなったと聞く。新しいものを考えてはどうか」の声が出て、検討の結果、金額的にも大きくなることで六四回生に共同寄贈を呼び掛け、賛同を得て実現した。贈られた校旗は、本絹糸、綾綿生地の縦八〇㌢、横一一五㌢の大型、二㍍余の支柱が付き、最頂部に本金メッキの飾り金具が付けられている(**写真左端**)。

前記のとおり今年度総会で、小菅会長・小平祐副会長(東京清陵会会長)など、昨年の百周年事業も含めて、四年にわたって同窓会を運営されてきた主メンバーが退任し、次の新役員体制で「諏中・清陵第二世紀」がスタートした。

会長＝宮坂久臣(岡谷市・49回)
副会長＝有賀裕(諏訪市・50回)、寺島敏郎(相模原市・50回)、茅野實(長野市・52回)、渕上良子(昭島市・56回)
監事＝井上彦次(諏訪市・42回)、小口成人(岡谷市・44回)

(63回生幹事・長田剛記)

《清陵高校　NOW》②

野球部、甲子園への決勝で惜敗

松商などシード校を連破、夢と興奮に沸く

七月二八日(日)、松本市野球場、清陵応援団はざっと四〇〇〇人。次々と「清陵はどっち側だ?」と入ってくる。

相手は東海大三高、同じ地元(茅野市)同士とはいえ今日ばかりは違う。午後一時すぎ東海大の先攻でプレイボール。互いに初回のチャンスを逃したあと、東海大は二回、スクイズで一点先行。すかさず清陵も三回、犠牲フライで同点に。四回東海大は二点を加えて一対三となったが、昨日までの「打力と逆転」の清陵なら、なんら問題はない。だが今日ばかりはちょっと不如意、五回の無死一、二塁もバント成功せず。九回裏、二死から四球で出塁するが、代打三振、ゲームセット。爆発したら止まらない打線を抑えた東海大の長坂投手に軍配。惜しかったのは一回裏。四球、連打で一死満塁。ここはまず一点と手堅い作戦もありえたが、茶城監督は「生徒の運にまかせる」主義。だが三塁ゴロ、三―本―一の併殺…。

閉会式のあと、学校に帰って健闘をたたえる会。選手も応援団も悔し涙より、健闘・感激の涙。「久しぶりに学校全体が一体となって盛り上がった。興奮した」と松下校長。茶城監督の希望で、歌えなかった校歌を斉唱。

松下校長は「密かに期するところあった」というが、それにしても決勝戦、甲子園直前まで進むとは!。OB・同窓会も準々決勝で、かの松商学園を破ったあたりから、本気で「心配」し始めていた。選手諸君、夢をありがとう。

一回戦からの戦歴は次のとおり。

一回戦、清陵10―1上田千曲
二回戦、清陵18―2長野日大
三回戦、清陵10―6長野吉田
四回戦、清陵11―6南安曇農
準々決勝、清陵5―4松商学園
準決勝、清陵4―3信州工業
決　勝、清陵1―3東海大三

(カットは朝日新聞長野版と長野日報、七月二九日付の合成。小平協記)

東海大三「夢舞台」へ

粘る諏訪清陵突き放す

諏訪清陵 5回の反撃機を逃す

◇決勝　松本市野球場

東海大三	0	1	0	2	0	0	0	0	3
諏訪清陵	0	0	1	0	0	0	0	0	1

諏訪清陵　夢持ち越し

試合重ねて成長

「うまくなった」

こたよ人生輩後輩

都心型の、開かれた大学を

明治大学学長　戸澤充則氏（51回）

「建学一一五年の伝統をふまえ二一世紀を迎える大学に高い理想をかかげて教育・研究条件の改善、改革に積極的に取り組みたい」

戸澤光則（とざわ・みつのり）さんは、三月の学部連合教授会の選挙で、岡野加穂留学長を破って新学長に。「私は（諏訪人らしく）不器用だから」といい、大学運営に全学教職員の連帯と英知を結集し、二年後に完成する二三階建て教育棟をシンボルに都心型大学として社会に開かれた、市民が学問研究に参画できる大学、生涯教育体系の確立を目指す。

「考古学では食っていけない」と父親に諭されたが、軍人志願の諏中生（昭和二〇年入学）は、戦後の混乱期の中で、〝本物の歴史〟を、遺跡の宝庫といわれた諏訪地方の山野・畑に土器・黒曜石を求めて歩き、二七年、東大、京大と明治だけにあった考古学専攻コースへの進学を決める。諏中の牛山秀樹教諭、諏訪考古学の藤森栄一会長、そして大学では後藤守一、杉原荘介教授らとフィールドはひろがった。

諏訪中、清陵高校の六年間は、「藤森先生の考古学研究所に通って、遺跡発掘や論文執筆の手伝い、先生の書店の店員もして夢多き実り豊かな青春」（藤森著『かもしかみち』あとがきから）を過ごし、「戦後といっても諏訪に来た疎開生もそうがつがつせず、みんな個性的で楽しく勉強していたよ。テニスだって県大会に出場した」と、当時のベストセラー『少年期』（波多野勤子）に書かれた〝いじめ〟も、とくに記憶にはないという。

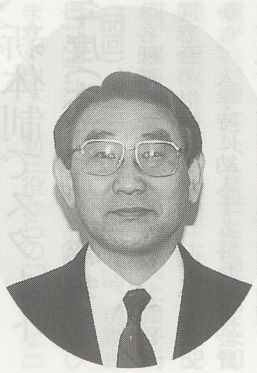
学位論文は「日本の旧石器時代」。群馬・岩宿遺跡の発掘は、在野の研究家・相沢忠洋氏の石器発見で明大考古学研究室が調査し、わが国の旧石器文化を掘り起した。戸澤教授は群馬岩宿文化資料館の初代館長も務めた。

地元民の研究に支えられた考古学。学長の「市民のための」開かれた大学がその根底にあり、自然保護運動でも全国展開する。

岡谷市出身、六三歳。（中谷範行記）

筑波に、もっと多くの清陵生を

筑波大学副学長　赤羽　武氏（55回）



「大学院の充実、教養教育のあり方、教員の意識改革などに取り組みたい」と、基本目標を掲げ、多様なカリキュラムの編成や入試の改善について述べたのち、教員の意識改革については、「授業に対する学生の要望に耳を傾ける一方で、私語の多い学生を追い出したり、成績が悪ければ単位を出さないなど、厳然とした態度で臨んでもよい」と、赤羽武（あかは・たけし）副学長は、筑波大学新聞の就任インタビューに答えている。

江崎玲於奈筑波大学学長の再選により、五副学長が四月に新たに指名され、氏は教育担当の副学長に就任した。筑波大学は、昨年創立二〇年を迎えたが、「管理大学」という目で世間からは眺められているだけに責任は重い。

「そういう面があったかもしれない。しかし、大綱化に伴う新しいカリキュラム編成などでは、他大学にない特色を打ち出している」と意欲的な教育実現を目指している。農林学系長四年、農林学類長三年、第二学群長四年、農学研究科長一年と研究教育の責任ポストを歴任してきている。そこで今度は、「攻める側から、守る側に移り苦労している」と苦笑する。

専門は林業経済・林政学。学位論文は「木炭の生産構造とその展開過程」。「山村問題の分析視角に関する一試論」（昭和後期農業問題論集23巻所収）や林学賞は、氏の研究者としての力量を示している。現在は大学院生二名の指導を除いて、研究教育とは無縁になったと残念そう。

清陵同窓会との付き合いは多くはないが、中洲小学校同級会などへは無理しても出席している。「清陵生は筑波大学を敬遠しているのだろうか。もっと大勢入学して欲しい」と母校へエール。

九州大学農学部助手から三〇年前に東京教育大学助手になり、一六年前に筑波大学教授。自宅は伊勢原市にあるため、金帰月来のスタイルで筑波での単身赴任生活を一九年続けている。無趣味が趣味という真面目人間である。

中洲神宮寺出身、六二歳。（林尚孝記）

サークルだより

「OB／建設部会（仮称）」結成

諏中・清陵の卒業生は、もちろんいろいろな職業・職種に就かれているが、今年五月二一日の夕方、設計事務所・建設会社関係の有志が集まって、懇談会を開きました。とりあえず発案者（金井・63回）の独断で、東京支部名簿より二十余名の方に連絡をして、一一名が参集。初めてお目にかかる大先輩・同年代・後輩など垣根なく、歓談が続き、二次会も不要でした。

今回欠席された方からも「次回は出るから、必ず連絡を」という声が多く、低迷する建設業界で日頃ライバル関係にあるとはいっても、そこは同窓生同士、今後とも年一～二回の会合開催を「決議」しました。

会長には、出席者の総意で日東建設（株）の伊東清博副社長（42回）を選出。会場および事務局は生越万理子さん（旧姓水端、66回）経営の「せいりょう」とし、次回は三〇名ほどを予定して九七年の新年会を開きます。ご出席希望者は下記事務局か幹事までご連絡を。また私どもが承知していない同業者・関連業界の同窓生も、どうぞお誘いください。多数の方の参加を期待しています。

（幹事＝東洋建設／建築営業部／金井英雄／電話三二九六-四六五六、事務局＝「せいりょう」／電話三五八一-一四四二）

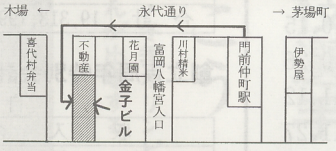
追記＝同窓生で開いている各種サークル・会合を、ぜひ本紙事務局までお知らせください。

お店探訪 ③

海の幸（門前仲町）

地下鉄東西線「門前仲町」駅下車、永代通りを木場方面へ、富岡八幡様の前を通り約五分、不動産屋の角を左折したところに「**生もの　海の幸**」なるお店がある。

知る人ぞ知る、金子政喜さん（59回）がオーナーの店で、魚と来たら飛び切り新鮮、その他メニューは豊富、酒がまた旨い、しかも料金は格安とくれば、飲兵衛たる者、一度は行かずばなるまい。



金子ビルご案内

昨年の一〇〇周年記念同窓会名簿にも掲載されていたが、「築地　嘉徳」という広告を見た方はおありだろう。金子さん（写真は店の前で）は湖南の出身、大学卒業後、苦労を重ねて、一代で築地魚河岸に、この仲卸の大店を創立した人である。

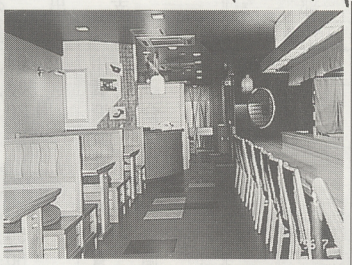
「海の幸」はその「嘉徳」のいわばアンテナショップだから、魚が旨いはず。

一階二階は居酒屋、セットメニューは三〇〇〇円、それに酒は飲み放題でプラス一〇〇〇円である。

なお、三階はカラオケ・ルーム「LAPAZ（ラパス）」になっており、いつも賑わっている。

江東区富岡一―二二―二〇金子ビル　☎〇三―三六四三―〇九六五

（赤坂）白紙庵

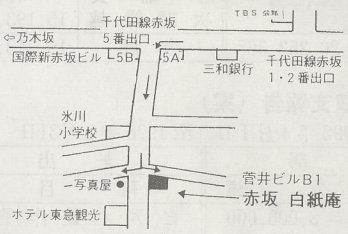


都心に近くて雰囲気よく、静かで美味、価格も手頃。そんなお店が赤坂にある。横川紀夫さん（61回）をはじめ、ご兄弟が役員として名を連ねる「**白紙庵**」（はくしあん）がそれ。テーブル席二十余の他にカウンター、個室もあり、旬のものが味わえる一〇〇〇円くらいからの一品料理のほか、本格的懐石料理も楽しめる。

支配人の稲葉さんによれば、「いい食材を手に入れるのに苦労します。懐石料理といっても決まり切ったものでなく、その日に入った材料で思わぬものが出てくる、その楽しさを味わっていただければ」と。もともと「白紙庵」という名前には歴史と由緒があり、一度暖簾をおろしたが、稲葉さんにより、当時用いていた食器の類を引き継いで今のお店になった。

昼には天丼（一五〇〇円）、松花堂御膳（二〇〇〇円から）などもあり、近くのサラリーマンやOLで賑わっている。懐石（一万二〇〇〇円）とおまかせコース（一万円）も、土曜日に限り半額。ただ、材料の都合、時刻により混雑するので、是非予約してほしいとのこと。

港区赤坂二―二〇―一九赤坂菅井ビル　☎〇三―三五〇五―八九四〇



東京清陵会の現況

東京清陵会の現勢は次のとおり。

（一九九六・六・一〇現在）

一、**同窓会東京清陵会会員の定義**

(1)首都圏（東京、神奈川、埼玉、千葉、群馬、栃木、茨城）在住の同窓生（ただし、退会申入れ者を除く）。

(2)転居して首都圏を離れたが支部会費を納入している同窓生。

二、**会員現勢**＝総数四一七九名（住所不明者二六七名を除く）

①都県別内訳＝東京都二一四七名、神奈川県八六一名、埼玉県四七九名、千葉県五〇五名、茨城県九二名、群馬県二六名、栃木県二五名、その他四四名

②年次別会員数（別表1）

三、**会費納入状況**（一九九二・四～一九九七・三会計期）

①納入者総計一八七九名

②年次別会費納入者数（別表1）

③年度別納入額および人数（別表2）

一九九五年度会務報告

一九九五年

9・8　総会打ち合せ会議＝はくおうクラブ、総会運営について、会長・62回生など二〇名。

9・13　第二九回東京清陵会総会＝虎ノ門パストラル鳳凰の間、62回生担当、三一七名出席。創立百周年記念テレフォンカード配布、前田由美子さんらによる琴演奏。

9・16　百年史編集委員会＝清陵会館。

10・26　第三〇回総会打合会、六三回生第一回打合会＝鹿島KIビル社員クラブ、出席一五名。

10・28　百年史編集委員会＝清陵会館。

11・4　創立百周年記念講演＝江藤淳氏「漱石とその時代」、諏訪市文化センター。

11・5　創立百周年記念総会＝出席者約一二〇〇名。ビデオ販売六一本。

12・2　百年史編集委員会＝清陵会館。

12・4　事務打ち合せ＝日本橋倶楽部、会長など三名。

別表1　年次別会員数と会費納入結果（6月10日現在）

回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)
17	1	0	1(—)	45	62	1	63(44)	74	82	9	91(29)
18	2	0	2(—)	46	80	1	81(53)	75	51	8	59(15)
19	1	0	1(—)	47	77	5	82(54)	76	41	9	50(14)
21	4	0	4(—)	48	83	2	85(55)	77	58	8	66(21)
22	3	0	3(—)	49	123	2	125(67)	78	56	11	67(15)
23	7	0	7(—)	50	103	4	107(65)	79	51	12	63(15)
24	2	0	2(—)	51	116	4	120(75)	80	42	10	52(8)
25	8	1	9(—)	52	125	1	126(86)	81	46	11	57(11)
26	8	1	9(—)	55	37	0	37(25)	82	42	10	52(8)
27	10	0	10(—)	56	124	5	129(74)	83	74	17	91(28)
28	21	1	22(—)	57	132	3	135(80)	84	54	4	58(11)
29	8	0	8(—)	58	119	2	121(74)	85	65	10	75(7)
30	18	0	18(—)	59	114	5	119(64)	86	47	3	50(7)
31	20	1	21(—)	60	124	4	128(78)	87	37	0	37(1)
32	24	3	27(—)	61	118	2	120(68)	88	39	2	41(7)
33	22	1	23(—)	62	116	4	120(57)	89	37	1	38(4)
34	27	0	27(—)	63	118	4	122(69)	90	27	5	32(2)
35	35	0	35(—)	64	96	2	98(51)	91	26	2	28(1)
36	34	3	37(—)	65	78	4	82(27)	92	19	0	19(0)
37	23	2	25(13)	66	90	5	95(37)	93	14	1	15(1)
38	42	0	42(33)	67	99	5	104(28)	94	4	0	4(0)
39	39	1	40(28)	68	95	5	100(34)	95	4	0	4(0)
40	37	0	37(28)	69	93	6	99(40)	96	10	0	10(1)
41	60	0	60(38)	70	101	9	110(38)	97	2	0	2(0)
42	54	0	54(46)	71	71	11	82(22)	98	2	0	2(0)
43	64	0	64(47)	72	60	10	70(19)				
44	67	1	68(41)	73	54	12	66(18)	計	4179(267)		(1882)

注）1）（　）内は現会計期（1992.4～1997.3）会費納入者の人数
　　75歳以上（36回以前）の会員は会費免除
　　2）不明者は以前東京支部に登録されていて現在所在不明のもの
　　3）前会計期（1987.4～1992.3）は1992年3月で終了
　　4）現会計期納入人数1,875名と納入者数1,882名の差は前納者7名分の差
　　5）終身会員606名

別表2　年度別納入額および納入者数

前期納入額総計（1987.1～1992.3）5,993,670円				
内訳	～1987年4月	小計	70,000円	(7名)
	1987年4月～	小計	3,378,200円	(1,111名)
	1988年4月～	小計	342,000円	(110名)
	1989年4月～	小計	43,600円	(9名)
	1990年4月～	小計	1,247,285円	(435名)
	1991年4月～	小計	912,585円	(170名)
今期納入額総計（1992.4～1997.3）9,748,985円				
内訳	1992年4月～	小計	4,351,185円	(1,021名)
	1993年4月～	小計	2,090,400円	(353名)
	1994年4月～	小計	1,428,800円	(236名)
	1995年4月～	小計	1,855,600円	(289名)
	1996年4月～	小計	23,000円	(3名)

一九九六年

1・12　新年会＝小平会長叙勲祝賀、せいりょう、会長ほか十一名。

1・13　百年史編集委員会＝清陵会館。

2・1　打ち合せ会議＝日本橋倶楽部、会長など四名。

2・2　ビデオ制作委＝岩波映画、六名。

2・4　百年史編集委員会＝清陵会館。

2・7　会計打ち合せ＝河合会計事務所、二名。

3・2　同窓会本部幹事会＝清陵会館、東京清陵会から四名出席。

3・3　百年史編集委員会＝清陵会館。

3・7　事務打ち合せ＝日本橋倶楽部、会長など五名。

3・22　事務打ち合せ＝日本橋倶楽部、会長など五名。

3・29　常任幹事会＝南青山会館、会長など一二名。

4・6　百年史編集委員会＝清陵会館。

4・24　第一回編集委員会＝岩波書店、七名。

5・18　百年史編集委員会＝清陵会館（最終委員会）。

5・29　第二回編集委員会＝東洋経済〝うすけぼー〟、八名。

6・3　本部幹事会＝清陵会館、東京清陵会から五名出席。

6・13　幹事会＝南青山会館、会長など四二名出席。

6・23　平成八年度（本部）同窓会定期総会＝諏訪シティホテル成田屋、出席者約一五〇名、講演はやまさき十三氏、武居俊樹氏（63回）。

6・27　第三回編集委員会＝海の幸、八名。

7・20　長野県高校同窓連総会＝健保会館、一名。

1995年度収支決算報告（案）

自1995年4月1日　至1996年3月31日　（単位：円）

収入の部 科目	予算額	決算額	支出の部 科目	予算額	決算額
総会会費	1,750,000	2,135,000	総会費用	2,100,000	2,340,153
会員年会費	1,200,000	1,855,600	会議費	300,000	252,343
寄付金	50,000	50,000	諸会費	30,000	0
受取利息	200,000	81,569	通信費	700,000	681,104
幹事会費	40,000	37,000	印刷費	100,000	135,188
名簿代	0	20,000	事務雑費	240,000	144,440
雑収入	0	0	清陵会だより	550,000	736,349
前期繰越	16,073,199	16,073,199	パソコン費	50,000	0
			予備費	50,000	0
			次期繰越	15,193,199	15,962,791
合計	19,313,199	20,252,368	合計	19,313,199	20,252,368

創立百周年特別会計収支報告（案）

自1992年4月1日　至1996年3月31日　（単位：円）

収入の部 科目	金額	支出の部 科目	金額
記念事業補助金	8,000,000	ビデオ製作費	16,286,263[2]
ビデオ販売代金	12,705,400	プリントパック代	1,656,993[3]
預金利息	2,415	発送諸掛	1,897,844
		販売費	866,715[4]
計	20,707,815	計	20,707,815

注 1）収支報告書は累計で計算.
2）ビデオ製作費は，岩波映画販売㈱に支払い済.
3）ビデオ販売本数は3,361本.
4）販売費には「会議費」「パンフ製作費」などが含まれる.

1996年度収支予算（案）

自1996年4月1日　至1997年3月31日　（単位：円）

収入の部 科目	金額	支出の部 科目	金額
総会会費	2,400,000	総会費用	2,670,000
会員年会費	1,500,000	会議費	300,000
寄付金	50,000	諸会費	30,000
受取利息	80,000	通信費	700,000
幹事会費	40,000	印刷費	150,000
前期繰越	15,962,791	事務雑費	200,000
		会報製作費	700,000
		事務用パソコン費	300,000
		予備費	50,000
		次期繰越	15,452,791
合計	20,032,791	合計	20,032,791

訃報

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。（敬称略）

氏名	年次	逝去年月日
岩波　幹文	(34回)	1992. 7.24
小林　睦彦	(37回)	1994. 1. 1
田中　弘	(43回)	1994. 7.27
渡辺　正毅	(30回)	1994.10.15
新村　寛	(24回)	1994.10.26
片倉　英夫	(68回)	1994.11.12
土田　三蔵	(25回)	1994.11.27
山田　利男	(51回)	1995. 1. 1
小松　健治	(47回)	1995. 1. 9
東久世通一	(52回)	1995. 1.28
赤沼　一男	(34回)	1995. 2.10
堀内　宗一	(33回)	1995. 2.11
平出　賢	(20回)	1995. 3. 5
小松　一夫	(36回)	1995. 3. 5
小口　久朗	(32回)	1995. 3.16
中谷　千章	(28回)	1995. 4.21
小坂　四郎	(41回)	1995. 5. 8
濱　春雄	(28回)	1995. 5.10
小坂　三郎	(41回)	1995. 5.11
今井　大	(34回)	1995. 5.12
今井　哲哉	(49回)	1995. 7. 4
竹村　茂一	(27回)	1995. 7.13
伊藤　礼吉	(46回)	1995. 7.16
小幡勇二郎	(21回)	1995. 7.29
小口　健二	(33回)	1995. 9.18
小松　源久	(43回)	1995.10.16
榊原　茂	(52回)	1995.10.18
山田　亨	(29回)	1995.11.25
古厩　清夫	(49回)	1995.10.28
植松　典昭	(47回)	1995.12.27
高木　栄一	(41回)	1996. 3.15
久保田文市	(58回)	1996. 4. 3
小口　行人	(28回)	1996. 4.11
長田　一男	(72回)	1996. 4.21
金子　和彦	(63回)	1996. 5.25
大庭　清	(49回)	1996. 6. 3

（事務局に連絡が入った方）

あとがき

▼久しぶり、七月二一日、清陵祭をのぞきました。女子生徒の多さはいまさらですが（8頁写真）、部室の汚さも不変です。小口先生指摘のとおり（5頁）、主義主張が少ないのも時代でしょう。ただ、美術や書道など芸術系は頑張っていると思われました。

▼たまたま野球部も、シード校・長野日大にコールド勝ちするなど活躍中でしたが、清陵祭内のどこにも速報やら檄文なし。OBも含めて皆、二六日の松商学園戦あたりから、「これは本物」となったのでしょう。ひと夏いい汗でした（13頁）。

▼次は冬、上原三枝選手です（1頁）。取材のとき通された部屋に、普通のOL・お嬢さんが二人、「上原さんはまだかな」と思っていたら、そのうちの一人が上原さん。相互に大笑い。もともと教職を目指していた彼女、さすが（?）清陵OG、理路整然と小さい体で勝てる訳を説明してくれました。

▼会報編集にご協力いただいた先輩・後輩の皆さんに感謝いたします。また、昨年の記念刊行物の写真を一部活用させていただきました（63回・小平協記）。